

とっても、あんまり、ちょこっと塾

日本史と古文

1. 2ページは神奈川県公立高校の過去問です。選択肢として挙げられている古典文学の題名を書きだしなさい。
2. 日本史の流れを把握するために、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代が始まった西暦年をしらべなさい。
3. 4ページと5ページに挙げた重要な古典文学について、作者、時代、冒頭文および内容を読みなさい。興味のあるものについては、暗記しなさい。

1 竹取物語

2 枕草子

3 平家物語

4 徒然草

「退屈なのにまかせて心に浮かんだりとめのないことを書きつけていった。」という内容で始まり、筆者の自然や人に対するものの見方や考え方について述べられている鎌倉時代に書かれた随筆である。

(カ) 次の文章は、ある古典文学作品について説明したものである。その古典文学作品として最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

「月日は永遠にとどまることのない旅人のようなものであつて、過ぎ去つては新しくやつてくる年もまた旅人である。」という内容の文章で始まる江戸時代に書かれた紀行文であり、東北や北陸などを経て大垣（岐阜県大垣市）に至るまでの旅行中の出来事が記されている。

1 枕草子

2 おくのほそ道

3 土佐日記

4 平家物語

平安時代初期、醍醐天皇の命令によつて作られた最初の勅撰和歌集である。約千百首の歌が春・夏・秋・冬・恋などの部に分類されて編集されている。撰者は、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人である。

1 万葉集

2 古今和歌集

3 新古今和歌集

4 和漢朗詠集

「祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。」という内容で始まる鎌倉時代に成立した軍記物語である。ある武家の一門の約五十年にわたる榮華と滅亡を描き、琵琶法師の語りによつて広く民衆に親しまれた。

1 源氏物語

2 平家物語

3 竹取物語

4 伊勢物語

1 おくのほそ道

2 徒然草

3 平家物語

4 枕草子

「春は明け方。」という内容で始まる平安時代に成立した隨筆で、約三百段からなる。一条天皇の中宮（后）に仕えた女房によつて書かれた。宮廷の日常生活を記録したものや自然や人間にに対する感想などが描かれている。

日本の歴史と文学

500

1000

1500

645	710	794	1185	1467
大化の革新	平城京	平安京	鎌倉幕府	応仁の乱
佛教伝来	古事記？	900古今和歌集	1333鎌倉滅亡	
538	万葉集	1000枕草子	1230平家物語	
			1330徒然草	
			藤原定家	

1500

1600

1700

1800

1900

2000

1603	江戸幕府	1716	1868	明治維新
		享保	寛政	天保
			葛飾北斎	1912大正元年
		1702	奥の細道	1926昭和元年
				平成元年1989
				令和元年2019

遣唐使廃止：894(白紙に戻そう遣唐使)

check！：漢字文学からひらがな文学への移行
万葉集 ⇒ 古今集 ⇒ 枕草子

藤原定家：新古今和歌集、百人一首の編者

無常觀：平家物語・方丈記・奥の細道の序文

題名 著者	成立 年	冒頭文 / 解説
万葉集	奈良 760以降	現存する最古の和歌集。4500余首が万葉仮名で記述されている。 田兒之浦 従 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺 尔 雪波零家留 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士のたかねに 雪は降りつつ
竹取物語 作者不詳	平安 900頃	今となっては昔のことですが、竹取の翁という者がいました
伊勢物語 作者不詳	平安 900頃	むかし、男ありけり / 名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人 はありやなしやと 在原業平をモデルにしたと伝え垂れる歌物語。
古今和歌集	平安 900頃	(仮名序) やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことのはとぞ なれりける。(真名序) 夫和歌者、託其根於心地、発其華於詞林者也。
土佐日記 紀貫之	平安 935頃	男が書くと聞く日記というものを、女(の私)もしてみようと思って書くので ある。
枕草子 清少納言	平安 1000頃	春は曙(あけぼの)。やうやう白くなりゆく山際(やまぎわ)、すこしあかりて、 紫だちたる雲の細くたなびきたる。
源氏物語 紫式部	平安 1000頃	いづれの御時にか、女御(にょうご)、更衣(こうい)あまたさぶらひたま ひけるなかに、いとやむごとなき際(きわ)にはあらぬが、すぐれて時めき たまふありけり。 光源氏の恋愛、権力闘争など貴族社会を描いた54帖の小説。

題名 著者	成立年	冒頭文 / 解説
今昔物語 作者不詳	平安 1120頃	<p>今は昔、皇極(こうぎょく)天皇と申し上げた女帝の御世に、皇子の天智(てんじ)天皇は皇太子でいらっしゃいました。</p> <p>今は昔、摂津国の辺りで、盗みをするために上京してきた男がいた。まだ日が落ちていないので、羅城門の下に隠れていた。</p>
方丈記 鴨長明	鎌倉 1212	<p>行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。</p> <p>枕草子、徒然草と共に三大隨筆のひとつ。天変地異も記載され歴史的資料としても重要。</p>
新古今和 歌集 藤原定家ら	鎌倉 1220頃	<p>やまとうたは、むかしあめつちひらけはじめて、人のしわざいまださだまらざりし時、葦原中国のことのはとして、稻田姫素鷦のさとよりぞつたはれりける。(仮名序)</p>
平家物語	鎌倉 1230	<p>祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり 姿羅双樹の花の色盛者必衰の理を顯す 奢れる人も久しからずただ春の夜の夢の如し</p>
徒然草 兼好法師	鎌倉 1330頃	<p>つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。</p>
奥の細道 松尾芭蕉	江戸 1702	<p>月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也 舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふる物は日々旅にして旅を栖とす</p>

古文のポイント

- 歴史的仮名遣いを知ろう
 - くれなゐ(紅) たつたがは(竜田川) みづ(水) けふ(今日)
- 係り結びの法則を知ろう
 - 係りの助詞:ぞ、なむ、や、か、こそ
 - 結びの活用形:ぞ・なむ・や・かー連体形、こそー已然形
 - 意味:強調(ぞ、なむ、こそ)、疑問・反語(や、か)
- 枕詞や序詞があるんだ
 - ちはやぶるー神、あしびきの一山、山鳥の尾のしだり尾の一長
- 主な作品の冒頭文を知ろう
- 頻出単語を知っているといいかも

百人一首

短歌	文法
あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む	枕詞+序詞+係結
陸奥(みちのく)のしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに	歴史的仮名遣い
ちはやぶる 神代(かみよ)も聞かず 竜田がは からくれなゐに みづくくるとは	歴史的仮名遣い + 枕詞
月見れば千々(ちぢ)に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど	係り結び
恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか	歴仮名+係結「き」の已然形
いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重(ここのは)に匂ひぬるかな	歴史的仮名遣い
長らへばまたこのごろやしのはれむ憂(う)しと見し世ぞ今は恋しき	係結2個+歴仮名「む⇒ん」
人も愛(を)し人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は	歴史的仮名遣い

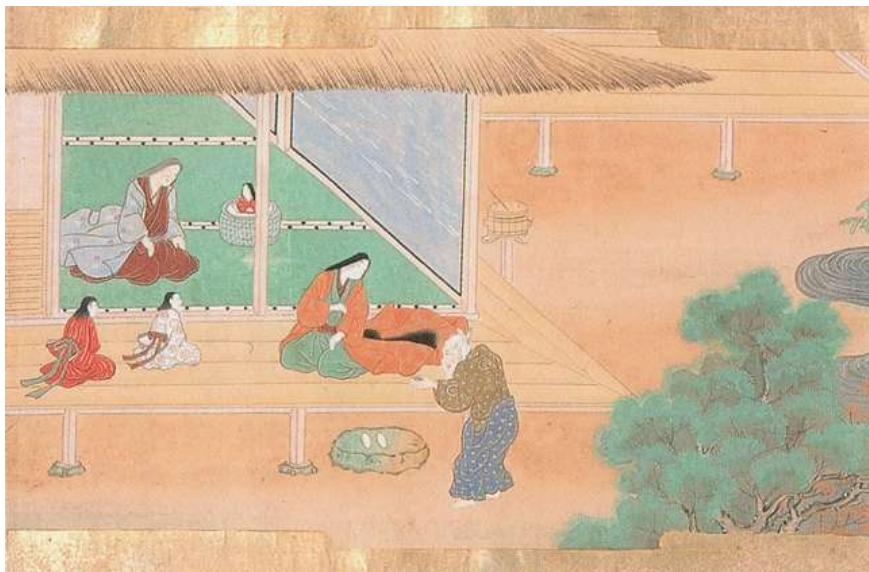
単語帳

古語	現代語	古語	現代語
あいなし	つまらない、不快だ	あさまし	意外だ、驚きあきれたことだ
あはれなり	趣がある、かなしい	あした	朝、翌朝
ありがたし	めったにない、難しい	うつくし	かわいらしい、うつくしい
いとほし	気の毒だ	えもいはず	何とも言いうがなない
かなし	かわいい、趣がある	おどろく	目を覚ます、気づく
すさまじ	興覚めだ、がっかりした	さうざうし	もの足りない
つゆ	まったく～ない	つきづきし	似つかわしい、ふさわしい
ねんごろなり	心がこもっている、親切だ	つとめて	早朝
はづかし	立派だ、気詰まりだ	つれづれなり	たいくつだ
をかし	趣がある、美しい	やうやう	だんだんと

竹取物語

けり (過去) 助動詞
…た …たそうだ

なむ (強調) 係りの助詞
「けり」の連体形「ける」で
結ぶ



作者・年代不詳

今となつては昔のことですが、竹取の翁という者がいました。野や山に分け入つて竹を取りてはいろいろなことに用立てたのでした。その名をさぬきの造と言いました。(ある日) その竹の中に根元が光る竹がひとつありました。不思議に思つて近寄つてみると竹筒の中が光っています。それの中を見ると三寸ぐらいの人がとてもかわいらしい様子で座っています。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづのことに使ひけり。名をばさぬきの造となむいひける。その竹の中にもと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人いとうくしうてゐたり。

土佐日記

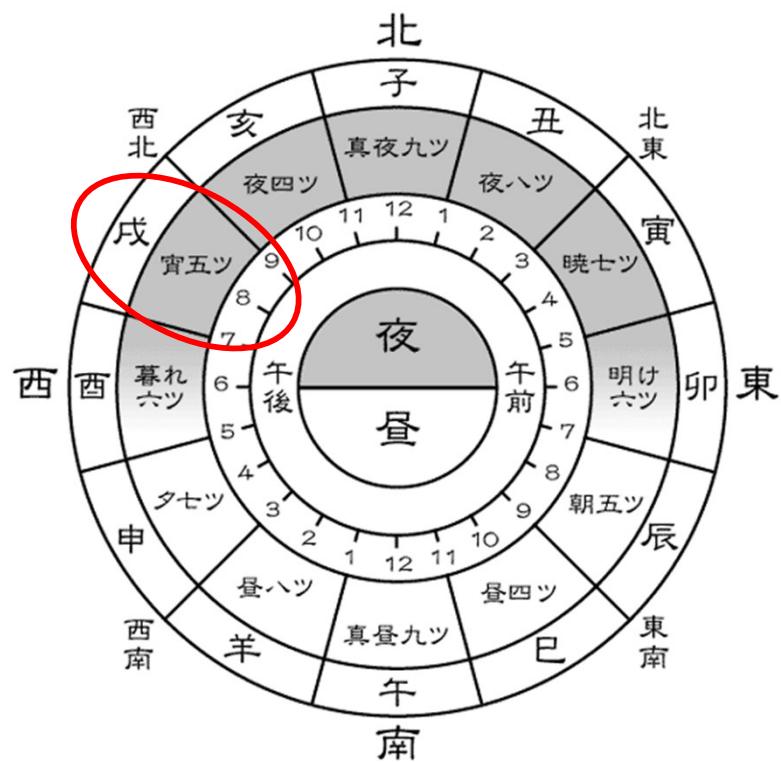
紀貫之・935年頃

するなる（サ変「す」+伝聞「なり」）

…すると聞いている

するなり（サ変「す」の連体形+断定「なり」）

…するのである



伊勢物語

作者不詳(モデルは在原業平?)・平安中期(10世紀?)

むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女は、らかに住みけり。この男かい、まみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくて、ありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりころもしのぶの乱れかぎりしられずとなむおひつきて言ひやりける。ついでおもしろき」とどもや思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢ摺り誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくにといふ歌の心ばなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

昔、ある男がいた。元服の儀式をすませて、奈良の都春日の里の領有する土地の縁があつて、狩をしに行つた。その里にとても美しく色香漂う姉妹が住んでいた。男はその姉妹を垣根越しに覗き見た。すると想像していたよりもはるかに美しい姉妹だった。古い都には似つかわしくないほど美しかったので、男は気持ちをかき乱されてしまった。男は着ている狩衣の裾を切つて、それに歌を書いて姉妹に送つた。男はちょうどしおぶ摺りの乱れ模様の狩衣を着ていた。

春日野の若紫の摺り衣、その乱れた模様のように、私はあなた方のためにこんなにも心乱されてしまいました。男はすかさず大人びた態度で歌を贈つた。この歌を贈るなりゆきが男は時機にかなつて、趣深いとでも思つたのだろう。

「陸奥のしのぶ摺りの乱れ模様のように、こんなにも心乱されたのは誰のせいでしょうか。それは私自身のせいじゃない。まさにあなたのために、心乱されたんです。」という河原左大臣源融の歌の情緒である。昔の人は「んなふうに情熱にまかせて、風流な」とをしたものだ。

伊勢物語

東下り

むかし 男ありけり。その男 身をえうなきものに思ひなして 京にはあらじ あづまの方にすむべき國もとめにとて ゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくて まどひいきけり。三河の國ハ橋といふ所にいたりぬ そ」をハ橋といひけるは 水ゆく河のくもでなれば 橋をハわたせるによりてなむ 八橋といひける その沢のほとりの木のかげにおりぬて カれいひ食ひけり。その沢にかきうばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく 「かきうばたといふ五文案 いつもじを句のかみにするて 旅の心をよめ といひければよめる

から衣 きつつなれにしつましあれば はるばるきぬる たびをしそ思ふ

とよめりければ みな人 かれいひの上に涙おとしてほどびにけり。 (中略)

なほゆきゆきて 武藏の國と下つ 総の國とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれぬて 思ひやれば かぎりなく遠くも来にけるかな とわびあるに 渡守 「はや船に乗れ 日も暮れぬ」といふに 乗りて 渡らむとするに みな人のわびしくて 京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも 白き鳥の はしとあしと赤き 鳥の大きさなる 水の上に遊びつつ魚いを を食ふ。京には見えぬ鳥なれば みな人見しらず。渡守に問ひければ「これなむ都島」といふを聞きて

名にしおはばいぞ 言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと
とよめりければ 船ごぞりて 泣きにけり。

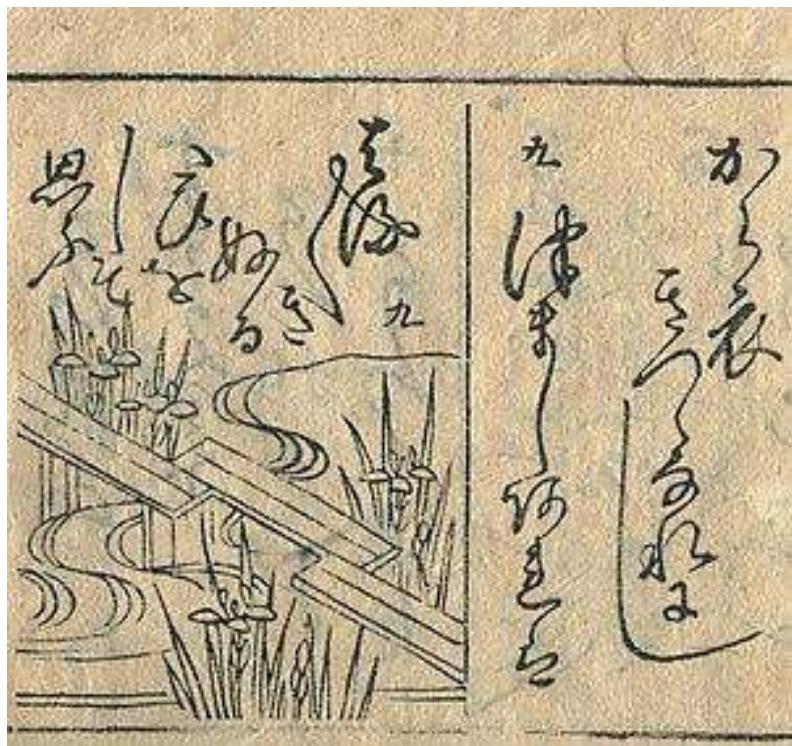
伊勢物語

東下り 現代語訳

昔 男がいた。その男は自分の身をいらないものと思つてしまつて「京にはいないでお」う 東国の方に住むのによい 国を探しに行こう と書いて行つた。前からの友人を一人2人つれていつた。道案内もなくて迷つて行つた。三河国のハ橋というところについた。そこをハ橋というのは水がクモの足のように分かれて流れているので 橋を八つ渡して、いたからね。ハ橋 というんだ。その水辺の木かげに下りて座つてお弁当を食べた。その沢にかきうばたがとてもきれいに咲いていた。それを見て一人がいつた。

「かきうばたという文字を句の頭に置いて旅の気持ちを詠め」といつたから詠んだ歌

からうごろもを きながら慣れ親しんだ つまがいるので そこから はるばるやつてきた たびを思うことだ
と詠むと みんな 妻を都においてきたものだから ごはんの上にぼたぼた涙を落としてごはんがふやけてしまつた。



伊勢物語



ゆりかもめ(都鳥)

東下り 現代語訳続

さらばどんどん行て 武藏の国と下総の国との間に
とても大きな川がある。それを隅田川とう。その川の
そばに集まって座つて思ひをはせると 限りなく遠くに
までも来てしまつた」とよと嘆きあつて いると船頭が
「早く舟に乗れ。日も暮れてしまひ」と言つので 乗つて
渡ろうとする。人々は皆わびしくて 都に想う人がい
ないわけではない。ちょうどその時 白い鳥で 嘴くち
ばし」と足とが赤い、鷗しきの大きさであるのが水の
上に遊びながら魚を食べる。都には見えない鳥なので
人々は皆 知らなかつた。船頭に尋ねると「これはなあ
都鳥」というのを聞いて

名にし負はばいざ言問はむ都鳥 わが思う人はありや
なしやと

「都」というとばを 名に負つて いるのならば わあ尋
ねよう 都鳥よ 私の想う人は生きていのかいないの
かとと詠んだので 舟の中の人は揃つて泣いてしまつた。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際 少し明かりで 紫だち
たる雲の細くたなびきたる

夏は夜。月のころはさらなり 間もなほ 番の多く飛びちがひたる
また ただ一つ一つなど ほかにうち光を行くもをかし。雨など降る
もをかし。

秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに 鳥の寝所
行くと 三つ四つ、一つ二つなど飛び急ぐ。あはれなり。まいて
雁などの連ねたるがいと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果
てて 風の音 虫の音など はた言ふべきにあらず。

冬はとめ。雪の降りたるは言ふべきにもあらず 霜のいと白きも
またさらでもいと寒きじ 火など急ぎおこして 炭持て渡るもいと
つきつきし。昼になりて めるくゆるびもいけば 火桶の火も 白
き灰がちになりてわろし

春は明け方がいい。だんだんと白くなうてゆく山際の方の曾良が
少し明るくなうて 紫がかた雲が細くたなびいているのがいい。
夏は夜がいい。月が輝いている時間帯は言つまでもなく 間月が
登つていなければのときでも 蛾が多く飛んでいるのがいい。またた
くさん飛び交うとはいなくとも 蛾が一匹一匹とほのかに光て飛
んでいるのも趣がある。雨が降っているときも趣がある

秋は夕暮れがいい。夕日が落ちてきて山の端が近く感じるようにな
なってきたころに 鳥が巣に帰ろうと 二羽四羽 一羽三羽と飛
び急いでいる様子にさえ心がひかれる。ましてや 雁などが列をつ
くつて飛んでいる様子が小さく見えるのはとても趣があつてよい。
日が沈んでしまってから聞こえてくる風の音や虫の音なども 言
うまでもなくよい。

冬は早朝がいい。雪が降っているときは言つまでもない。霜がおり
て白くなうているのもまたとても寒い時に 火を急いで起しそう
と炭をもてくるのも冬の朝に大変つかわしい。しかし 昼にな
なってだんだんと暖かくなつたときには 火桶の火も白い灰になつて
しあつているのは似つかわしくない。

新古今和歌集

藤原定家ら(撰者)1210年頃

仮名序

やまと^うたは むかし ^あめつちひらけはじめて 人の
のしわざい まださだまらざりし時 藤原中國の」と
のはとして 稲田姫素鷦のさとよりぞうたはれりけ
る しかりしより「のかた そのみちさかりにおこ
り そのながれいまにたゆる」となくして いろにふ
けり 「ふるをのぶるなかだちと」 世をおさめた
みをやはらぐるみちとせり。 (中略)

万葉集にいれる哥は「これをのぞかず 古今より」
のかた七代の集にいれる哥をば「これをのする事な
し。たゞし ことばのそのにあそび ふでのうみをく
みても そらどぶどりのあみをもれ みづにすむう
をのつりをのがれたるたぐひは むかしもなきにあ
らざれば いまも又しらざるところなり。すべてあ
めたる哥ふたちはたまき なづけて新古今和哥集
といふ。

仮名序 現代語訳

大和の国の歌は 昔天地が開け始めて 人の嘗みが
まだ始まつていな 時に 日本の言葉として櫛名田比
売 素戔鳴尊が住んでいた里より伝わった。その昔よ
り今まで その和歌の道盛んに興り その流れは今に
絶えることはなくて 恋情に没頭したり 心中を述べ
る仲立ちとして 世を治めて 民の心を和らぐ道具と
していた。 (中略)

撰歌の方針として 万葉集の歌は これを除かない
で 古今和歌集より 七代の勅撰和歌集の歌は これ
を載せる」とはない。ただし 多くの歌を調べ撰んで
も 空飛ぶ鳥も網を逃れて 水に住む魚も釣られるの
を逃れるたぐいは 昔も無いわけがないので 今もま
だ知られていない歌もあるかもしれない。全て集めた
歌は 二千首 二十巻あり 名付けて新古今和歌集と
いう

徒然草

吉田兼好・1330年頃



つれづれなるままで 日暮らし 砲にむかひて 心にう
つりゆくよしなじーとを そーはかとなく書きてくれ
ば あやしうじともぐるましけ
のだ

する」ともなく手持ちぶさたなのにまかせて 一日中
硯に向かって 心の中に浮かんでは消えていくとつとめ
もないことを あてもなく書きつけていくと (思わず
熱中して 異常なほど 狂つたような気持ちになるも
のだ)

卷22 第1話 大織冠始賜藤原姓語第一

今は昔 皇極 こうぎよく 天皇と申し上げた女帝の御世に、皇子の天智 てんじ 天皇は皇太子でいらっしゃいました。その当時一人の大臣がいました。蘇我蝦夷 そがのえみし といい、馬子（うま）の大臣 おとど の子です。蝦夷は長年 朝廷に仕えていましたが、老境に入り、からだも老い、衰えたので、参内する」とをすつかりやめてしましました。そのため、子の入鹿いるかを自分の代わりとして常に参内させ、政務を執り行わせていました。

これによて、入鹿は政権をほしいままにし、国を自分の思いのまま動かしていましたが、あるとき、皇太子でいらっしゃった天智天皇が蹴鞠けまりをしておられるところ、入鹿もやってきて、それに加わりました。そのとき大織冠 だいしょくかんはまだ公卿にもなっていない、大中臣 おおなかとみの「鎌子」というておいででした。この方も来て一緒に蹴鞠をなさつておられました。ところが、皇太子が鞠を蹴られたとき、お沓 くつ が御足から脱げて、飛んで行つた際、入鹿はおごり高ぶつた心から皇太子をすり馬鹿にして、あざわらいながらそのお沓を外の方 蹴飛ばしてしまいました。皇太子はひどく困惑され、顔を赤らめて立つておいでになりました。皇太子はひどく困惑され、顔を差し上げ、他の人でなく身分の低い自分が「このような」としても、それは自然な気持ちからで、大して悪いことをしたとも思わなかつたのでした。

（中略）

そのとき、大織冠が自ら太刀を抜いて走り寄り、入鹿の肩に切りつけたので、入鹿は走つて逃げようとするのを、皇太子が太刀を取つて入鹿の首を打ち落とされました。その首は飛び、高御藏たかみくら 大極殿の玉座のもとに参つて、「わたくしには罪がありません。何事によつて殺されるのでしょうか」と無実を申し上げました。天皇は「この企てを前もてご存知ない上に、女帝でいらっしゃいましたので、恐れられて、高御藏のとばりを開じてしまわれ、そのため首はとばりに当たつて下に落ちたのでした。

作者不詳・平安時代後期(1120年頃)

今昔物語